

音のない世界に生きる人びとと共に

わが想いを 両の手に

田中のり子

海竜社

わが想いを
両の手に

田中のり子

海竜社

〈著者紹介〉 田中のり子（たなか のりこ）

昭和6年東京生まれ。日本女子大学文学部卒業。

昭和47年に東京都手話通訳派遣協会登録手話通訳者に、

昭和51年には全日本ろうあ連盟認定手話通訳者となる。

現在NHK教育テレビ「聴力障害者の時間」に出演のほか、

手話講座や講演会の講師として活躍中。

著書に『こころで聴く』（講談社）がある。

わが想いを両の手に

定価 一、一〇〇円

昭和六十二年八月二十八日 第一刷発行
昭和六十二年十一月六日 第二刷発行

著者 田中のり子

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二ノ九ノ二（郵便番号） 一〇四
電話 東京（〇三）五四二—九六七 一 振替 東京一—四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとり
かえします。お買い求めの書店か小社へお申しいでください。

印刷所 新協印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

© 1987, Noriko Tanaka, Printed in Japan

ISBN4-7593-0189-5 C0095 ¥1100E

わが想いを両の手に

目次

音のない世界に生きる

小さな不幸……………	6
支え合う孤独……………	15
障害を越えて……………	26
寄り添う心……………	31
心が見えないとき……………	36
夜がこわい……………	43
心に祈りをもてば	
独立への道……………	52
心に祈りをもてば……………	63

出会いを心の糧として……………	74
-----------------	----

二人三脚の撮影行

霧氷の花の里……………	88
天気がわらった……………	101
時にめぐりあう……………	118

試練に耐えて

掌からこぼれ落ちる言葉……………	126
言葉ひとつの重さ……………	131
コトバナンテダイキライダ……………	136
きこえないってかなしいよ……………	142
補聴器は魔法の杖ではない……………	147
愛すればこそ……………	161

わが想いを両の手に

心の耳を、心の音を……………170

いのちの重さを手話に託して……………177

生き合い、支え合う老い……………183

愛あるコミュニケーションを……………191

老人の孤独地獄を救うもの……………199

私の手は話をする手……………207

あとがき……………213

カバー・扉写真……………田中 順

音のない世界に生きる

小さな不幸

四十年前の童謡

ひ鯉は お池の潜水艦

空には キラキラ銀の星

夫は十四歳で重い病氣の後遺症から聴力を失くした。

友人と自転車をとばしていて、過^{あや}って転倒し、右腕をコンクリートの道路にいやというほど打ちつけ、右足の踝^{くるぶし}をペダルとの間にはさみこんだ。

たいした怪我をしなかったのが不思議なくらいだったが、転んだ瞬間、あまりの痛さに思わず涙がこぼれたという。衝撃が骨に達していた。

町医の誤診から高熱が一週間も続いた。その熱の原因が転倒した時の衝撃によって引き起こされた『骨髄炎』という病気で、手術を要するとわかった時には麻酔も使えぬほどに衰弱していた。危く一命をとりとめた。

そんな病床で寝ていた日々にながれた童謡の一節が冒頭の詩である。あれから四十年近く経た今も、夫は時々この歌を口にする。

友達みんな学校にゆき、自分だけがくる日もくる日も、終日一人で床についていなければならぬ退屈さ、本にも読み疲れてぼんやりしている時に、家の者のだれかが幼い妹にレコードをかけてやってでもいるのか、『ひ鯉は、お池の潜水艦……』と、この歌がきくともなしに耳に入ってきたのであらう。

自分がきこえていた最後の頃、なんだかこの歌ばかりをきいていたように思うと言う。

小学校で体操の時間のすぐあとに音楽の勉強があり、はげしく体を動かしたあと、教室で先生の弾くピアノの音をききながら、窓辺に近い席でうつらうつらするのは、なんとも気持ちのよいものだったと話してくれたこともあった。腕白ざかりの男の子にとって、音楽とはその程度のものであったのだらう。

私はどちらかというと音楽好きなほうである。手話通訳という神経の疲れる仕事を終えてほっとした時、休日の忙しい家事の片付いた午後のひととき、香りのよい紅茶をいれ、そしておいしいクッキーでもあればそれを口にして音楽にしばしを憩う。

そんな私の様子に、夫は傍らで一緒にお茶を啜みながら、病み疲れた少年の日、末の妹のためにかけていた、手巻きの蓄音機から流れてくる童謡をきいていたのが思い出されるのか、もう一

度音楽がききたいなアと言ったりする。

それにしても十四歳まできこえていた夫の記憶の中にはどんな音楽があるのだろうか。『ひ鯉は、お池の潜水艦……』 だけではないはずである。

「ほら、戦死者の遺骨が帰ってくると、よく演奏された音楽があったろう。タンタッタター、タッタッタター……」

もう、少し音程が怪しくなってしまったメロディーを口ずさむ。

「ああ、わかった、それはショパンの葬送行進曲」

「あれをきくと、厳肅な気持ちになったな。何ともいえない荘重で悲しい響きだったのを覚えてい

る。そんな音楽の中を、白い布に包まれた遺骨を胸にした人々の列が肅々と進んでいったな」
夫は唯一のクラシック音楽をニュース映画の中でもあろうか、そんな情景と共に記憶していた。

戦時中に育った夫が他にも知っている音楽は軍歌ばかり。それも太平洋戦争末期のものは、もう耳を悪くしてしまっていて知らないという。それ等の歌も、正確に音程のとりようを失ってしまった耳では歌えなく、もっぱら覚えていた歌詞を口にするだけである。

雪の進軍 氷をふんで

どこが河やら 道さえ知れず……

「もの悲しい歌だね、戦意高揚どころか厭戦歌のようにさえ思えるね」

と言う。

私達が勇ましいものと思って歌っていた軍歌も、音を失った夫には別のものが見えている。

心の中の音楽

きこえない人の仲間に入って間もなくの頃だった。会の女性達が、きこえていた子供の時分に歌った童謡を、何人かで輪になってなつかしく思い出して歌っていたことがある。

夕やけ 小やけで 日がくれて

山のお寺の 鐘が鳴る……

「ねえ、田中さん、私達の歌おかしくない？」

と一人に訊かれて、一瞬答えに窮した。

フィードバックのきかなくなった人達の歌は一樣に音程がはずれてしまう。だが、きこえてい

た時分に覚えた歌をなつかしんで歌っている人に、

「おかしいわよ」

と無下には言えなかった。

「私も一緒に仲間に入っている？　一緒に歌いましょうよ」

大きく口をあけて一語一語をかみしめるようにして、体でリズムをとる。私は口もとに、彼女達の視線を受けて一緒に歌った。あの時の彼女達の音程のはずれた歌声が今も耳の底にのこっている。そしてあの時、歌は正確に歌うことだけがよいのではないということを私は知った。

音楽はいろいろな形で、一人一人の心の中にもつものなのだろう。

日本人はベートーベン好きなのだそうである。ご多分にもれず私もベートーベンは好きな音楽家の一人である。そしてベートーベンの優れた音楽を愛すると同時に、彼が耳疾に悩み、遂には聴力を失い『ハイリゲンシュタットの遺書』をしたため、何回か死を考え、そしてそれを乗り越え、そうした苦しみの中から数々の名曲をつくった、そのことに一層ひかれる。

音楽家にとって音を失うというのはそれこそ決定的なことである。

だれかが私のかたわらにいて遠くから響いてくる笛の音をきいたのに、私にはなにもきこえなかったとき、まただれかが牧人の歌うのをきいていたのに、やはり私にはなにもきこえ

なかったとき、それはなんたる屈辱だろう。そんなできごとが私を絶望の瀬戸際まで追いつめ、われとわが命を終わらせる危機一髪のところまでいった——、芸術だけが私をひきとめた。ああ、自分に負わされていると思われるすべてのものを産み出してしまふまでは、私はこの世を去ることはできない、と考えたのだった。そんなぐあいでは、私はこのみじめな人生を生き長らえてきた。

（『岩波ジュニア新書 ベートーヴェンの生涯』山根銀二著より）

私は第九交響曲の最終楽章の“歓喜の歌”をききながら涙を流すこともしばしばである。

夫は自分と同じように人生の途中から、しかも音楽家の身で聴力を失ったということで、ベートーベンの音楽がどんな音楽なのか尋ねたりもする。

けれども、どんなに説明しても夫にベートーベンのピアノソナタの数々を、ヴァイオリン協奏曲を、交響曲第三番を、第五番を、わからせることは出来ない。

夫はそれ等の音楽をきくことが出来ないのだから。

ある人が、音楽を感じとしてわかることが出来るのではないかと言ったことがある。感じとしてならば或いはわかることが出来るかもしれない。

風景写真を専門にしている夫は言う。

「たとえば、朝焼けの感じだとか、高原に花が咲いていてそこを静かに風が渡るような感じだとか、荒れ狂う波のようだとかってあるだろう……」

音楽がきけないということは、人が生きてゆくうえで、決定的な不幸とは言えないだろう。だが、

「僕はきこえなくなったことで、現在の自分を不幸とは思っていない。充分に自分の人生を生きている。でも、いい音楽がきけないことと、お前の声を一度もきいたことがないのだけは残念だ」

と夫が言う時、私はもどかしく思い、ちょっと悲しくなる。

きこえない悲しみ

私は手話が出来る。

きこえない人達は、言葉を声に出して話す代わりに、またその声を耳できいて受け止める代わりに手で話をする。

両の手からいろいろな言葉が、心のありようがつむぎ出される。

私はきこえない人々と手話をとおして沢山の話をしてきた。

ある時突然に、まったく予測もなかったのに耳がきこえなくなり、絶望と悲しみに打ちひし

がれた人達。深い深い癒やしようのない心の傷を抱えている人達。

「日曜日が地獄なの。休日は家中の人と朝食をとるでしょう。そんな時、夫と私が話をしていて、夫の口の動きだけではどうしても夫の言うことがわからないで、私がなん度もきき返すのを、姑がじっと見ているのよ。耐えられないわ」

彼女は、はじめての子供を出産した直後にきこえなくなったという。以来、家族の中でたった一人のきこえない人、きこえない嫁として生きてきた。

姑さんが脳卒中で倒れて亡くなった時、義姉や義妹たちから、嫂さんがぼんやりしていたから手おくれになり、死に到らせたというようなことを言われた。

長男の嫁として、葬儀に集まった人々に粗相のないよう、体中を目にし、耳にして努め、式が果ててほっとした時に娘から義姉や義妹の言ったことをきかされて、悔しさと悲しさのあまり寝こんでしまったという。

きこえないことは不便ではあっても、不幸ではないと言う聴覚障害者が多い。

きこえない身で生まれ、それをいやというほどのおもいで知らされた人、青春の真っ只中で聴力を失い何度も遺書を書いては消した人、仕事に油が乗ってこれからという時にきこえなくなり、そこから総てをやり直さなくてはならなかった人。

一時は己れの不幸をなげきはしたが、それを克服し、はねのけた人々は、生きてゆくうえで、

きこえないことに、いつまでもこだわることはないだろう。

だが、日々刻々の人生の中で、もどかしく、時に悲しく、すねたくなることもあるのではないだろうか。

それはこれ等の人達が「きこえない人」という特別な人ではなく、まさに人間であるからなのだ。

夫は言う。

「音楽がきかれないということは、決定的な不幸ではないさ、だが小さな不幸とは言えるな」と……。